

西田幾多郎の生命哲学

檜垣立哉



講談社学術文庫

西田幾多郎の生命哲学

檜垣立哉

講談社学術文庫

学術文庫版への序文

京都学派の哲学をもつと柔軟に、もつと横断的に理解したいというおもいを私は大學生の頃（一九八〇年代）からもつていた。何とも不思議にみえる文字の羅列に対する自分の独りよがりの欲求かとも当時はおもつていたが、考えてみれば、いろいろな背景がそこにはあった。それは今から振り返ってみればよくわかる。

当時、直接教わった先生のひとりに坂部恵がいた。坂部は、七〇年代から八〇年代というポストモダンの潮流のなかで、カント研究を中心に西洋哲学史の大きな流れにおいて思想史をとらえなおす作業と並行的に、九鬼周造や和辻哲郎などの日本の思想、それも日本人が（京都の西田をひとつの求心力として）オリジナルな思索をはじめめる地点でのその潜勢力をとらえなおす仕事を開始していた。また同時期に、中村雄二郎が西田幾多郎に関する著作を出版し、西田的な行為的直観の議論を、現代的な身体や創造性の議論として読み解きなおそうとしてもいた。さらにいえば、年代的にはそれ以前からであるが、精神医学者の木村敏が、西田の概念から大きな触発を受けた

がら、精神病理に対する独自の思考をおこなっていたということもある。

彼らは、直接的な西田の弟子や、あるいはその弟子の系統とはほとんど関連のないところで、西田や京都学派の哲学を、当時の現代哲学にむすびつけながら解読するという点において、異彩を放っていた。これは当時、西田やその周辺を読むことにとつて、大きな意味をなすものであった。

西田にせよ、九鬼や和辻にせよ、戦前の思想家たちは、西洋哲学の同時代的な流れを敏感に察知しながらも（これはこの書物のなかで特に強調して述べている）、それをまさに自分たちの「問題」そのものとして素手でとらえている。それ以降の哲学者（大学の職業哲学者たち）が、ほとんど現在にいたるまで「文献訓詁学」に回帰してしまい「問題」を問わなくなつたのが何故なのかは、これも考えるべきことは多いのだが（そして一概にそれを否定することもできないのだが）、それはここでは問わない。そうした文献学的洗練を経てしまうと、京都学派系の思想家が直接「問題」を扱つたのは、かなり粗野な仕方ではなかつたかという批判（とくに、彼らの政治的スタンスのナイーヴさなどへの、いわば後からの批判）が生じざるをえない。それもそれなりに真実だろう。だが、彼らが「問題」に向かつていったあり方は、凄まじさを感じさせるに十分なものがある。

彼らにおいて、よくいわれるように、東洋と西洋の問題、仏教的なものときリスト教的なものの対立という問題が現れていないわけではない。しかし彼らのテクストを読んでみると、そこには不思議なほどに西洋のモダンな思想とその方法論への圧倒的な信頼感がある。彼らの時代性を考えれば致し方がない稚拙さを勘案すれば、それを「好奇心」といいかえてもよい。彼らは、プラグマティズムや生の哲学、現象学や解釈学、ニーチェ的な古代への帰還などが示す諸概念を、アイデアの「おもちゃ箱」のようにひっかき回し、そこに日本的な言葉を実験的にくみこんでいったようにみえなくもない。だが、それは期せずして、ポストモダン状況における、脱近代的な模索と重なってしまう部分がたしかにあるのである。

だから彼らの書いたものは、ある意味では自由奔放で、どちらかというとポストモダンの無責任さと類比的な点がある。だが同時にそこで、さまざまな「概念の創造の実践」がなされているのもたしかなのである。そうした事態を念頭にいたうえでいえば、坂部や中村や木村が、京都学派の思考を、七〇年代―八〇年代において、たんなる日本思想や、また（日本なるものを本質主義的に固定したうえでの）「比較思想」の域をはるかに越えて、異質なものをかみあわせる生産性のなかで読み解いていくとしたことには、十分な理由と意義があるようにおもわれる。

そもそも彼らの格闘した問題は、あまりに巨大である。西田についていえば、場所や無、行為的直観やポイエシスというテーマは、まさに現代的な身体論、行為論、生命論にとつて、本質的な問いとむすびついている。九鬼がとらえた時間と偶然性という主題、そして和辻が論じた「あいだ」の人格論や風土に関する考察は、時間や環境性の議論が繰り返し争点となる現代的な位相において、数多くの刺激的な論題を提示してもいる。また、本文中でも触れるが、小林敏明の『西田幾多郎 他性の文体』（太田出版）というすぐれた本が示しているように、とりわけ西田の「日本語」での思索は、日本の「哲学」の可能性や、また思考の翻訳をめぐる根源的な位相を考えさせるものである。繰り返すが、それは西洋と東洋という出来あいの問題の枠組みにおさまるものではまったくない。むしろグローバルな状況における普遍性に届いているものとしか理解しえない側面がある。

これらのテキストを、たんなる過去の遺産として放置してしまうのはあまりに惜しい。しかしそこではどのような仕掛けを含ませればいいのか。ここでは私は（原本の現代新書版の副題を読まれれば奇策にしか感じられないかもしれないが）、ある種の正面突破を試みたつもりである。それは西田のテキストを、まずは西田の時代の文脈のなかに（ベルクソンとの連関）、そして同時にその文脈をあふれる余剰（ドゥルー

ズとのつながり」を際立たせつつ、配置してみるということである。

さきほどの、ポストモダンの文脈との関連に再び戻ろう。ポストモダンをどう評価するかはさておき、それ自身は「近代」というある時代的発想を丸ごとひきうけたうえで（その意味でポストモダニストはまずは徹底的なモダニストである）、そこから距離をとらざるをえない苦闘を扱うものである。坂部や中村や木村がおこなったように、日本哲学の源流を、ポストモダンとの関連でとらえるのは、きわめて明快な妥当性がある。それらはモダニストたらしながら、そこにはじめから距離をとらざるをえないものであるという点で、同じ方向を共有しているのだから。

だが、すでに時代が（坂部や中村よりも）二、三十年経てしまった現在の段階では、これに加え、さらにつきの二つのことが踏まえられねばならないのではないか。

そのひとつは、ポストモダンなるものが、すでに思想的系譜学のなかにはいつてしまったことである。ここでひきたてているドゥルーズも、あるいはフーコーやデリダも含めて、当時、流行の最先端ともてはやされた思想家たちは、すべて故人となった。そののみならず、その思考は後の時代のなかにすでに根づいて別様に書きかえられている。また同時に、彼らの思考の淵源がどこにあったのか、それらは相当に深い思想的ダイナミズムの提示であったということはないのかという議論も盛んにおこ

なわれている。ドウルーズに関しては、ベルクソンはいうまでもなく、一九世紀的文脈のマイナー思想（タルド、パース、微分哲学）との連関はきわめて重要である。

本論でも強調するように、西田や京都学派の思考も、プラグマティズム、生の哲学、微分哲学、あるいはニーチェ主義などと強いつながりを持ち、そこから新しい概念を創造しようと試みている。その点で、西田および京都学派は、すでに古典化されたポストモダン思想のバックグラウンドとして読むことも可能なのである。もちろん京都学派とポストモダンにはダイレクトなつながりはない。しかし問題はそこにはない。ポストモダン以前に、それとほとんど同じ文脈で、同じ方向をもって思考したということが重要なのである。

そしてもうひとつは、とりわけ生命論的な議論が、かつてとは異なった意義をもつて現れてきていることである。もちろんそれを支えているのは、八〇年代以降の免疫やゲノム、あるいは今世紀にとりわけ注目をあびている脳をめぐる技術や知見の変化であるにちがいない。しかしそうではあれ、そこで生命という発想をとらえることは、やはり生に関するいくつもの思考の流れを参照してかかるべきである。

西田の思考は、生の哲学からはじまり、場所の論理という環境論的な主題（それは和辻の風土論という、アフォードダンスの原型としても読める思考にも関わる）、身体

とその行為によるポイエシス（創造＝生成）をとりあげるものである（九鬼の偶然性の思考も、瞬間と生成をめぐるものにほかならない）。生命、場所と環境、身体と創造という、生命を論じるときに不可避な課題がそこに列挙されていることをみるのはたやすい。微分としての差異と分化、生命の個体についての議論、個と共同体との矛盾の同一性という、ポストモダン思想で中心的に主題化されながら、いまだ片づいてはいない生命論的な問いが、相当荒々しいかたちではあるが、そこでの議論の骨組みをなしている。本書はこれらを探るという意味で、西田哲学の「未来」を提示しようとして試みてもいる。それは現代的思考のたんなる「同伴者」であるというだけではなく、その根底をなし、それがゆえにさらにそれを先にひっぱっていく内容をもつものとしてとらえられるものである。

とはいえ、残された課題は多い。本書では、モダニスト／ポストモダニスト西田という姿をかなり強く押しだしたために、逆に日本文化や日本論のなかでの京都学派という（ポスト・コロニアル的な、あるいは政治的な京都学派批判を十分に踏まえたうえでなされるべき）主題にはほとんど踏みこめなかった。本書の補章として収録した大正生命主義に関する小論考は、ひとつのアプローチだが、やはりフランス哲学との連関を扱うそれらの文章では、この点については不十分である。たとえば折口信夫や

柳田国男、あるいは和辻が先鞭をつけている古層からの日本的精神に関する議論が、やはりどこかで関連させられるべきであるだろう。さらには禅とのつながり（これもまた特殊に日本土着化された仏教の形態であるだろう）という宗教性（あるいはこれも身体的な実践性である）の検討も不可欠である。

世紀がまさにポスト・コロンIALのそれであるかぎり、世界文化の多様性という観点からの日本と、そこでの（もとより）文明の交差点という特殊な位置づけを思想的に検討することは今後の課題である。そうした多様な研究がなされることで、日本の哲学のひとつのはじまりである京都学派のテクストがもつ潜勢力が、彼らの預かり知らないところで、さらに解放されていくことを願うばかりである。そしてそれこそがまさしく、哲学のもつ根源的な力を示すことでもある。

本書は、二〇〇五年に講談社現代新書から刊行された『西田幾多郎の生命哲学——ベルクソン、ドゥルーズと響き合う思考』に、序文を書き加え、その後に執筆したいくつかの論文をつけくわえたものである。新書版では、西田全集からの引用の巻数頁数が、前の全集のもの（『西田幾多郎全集』増補改訂版第二版、岩波書店、一九六五—一九六六）であったが、この本では、あらたに出版されたもの（『西田幾多郎全

集』、岩波書店、二〇〇二―二〇〇九）に変更した。

つづくわえた論考の出典は以下の通りであるが、文庫版収録にあわせて、内容は大幅に書きかえている。それぞれの執筆の機会を与えてくださった方々に感謝します。

論文出典

「大正生命主義と生政治」『フランス哲学・思想研究』（第14号）日仏哲学会、二〇一〇。

「生命と微分 西田と九鬼を巡るひとつの考察」日本哲学史フォーラム編『日本の哲学』（第9号）昭和堂、二〇〇八。

小泉義之氏との対談「西田から「哲学」を再開するために」KAWADE道の手帖『西田幾多郎 永遠に読み返される哲学』河出書房新社、二〇〇五。